vol.6

京都大学

白眉センターだより

Hakubi 白眉 Kyoto Univ.

THE HAKUBI CENTER NEWSLETTER

2　巻頭エッセイ（瀬原淳子）
3　コラム（Jeremy Rappleye）
4　シリーズ白眉対談⑤人文学
8　研究の現場から（江波進一、 坂本龍太、 今吉格、 置田清和）
12　白眉研究ピックアップ（小林圭、 米田英嗣、 Silvia Croydon）
14　異分野融合ワークショップ（楯谷智子）
17　ポスト白眉の日常（沙川貴大、 岸本展）
18　活動紹介：年次報告会・白眉合宿・白眉の日
19　お知らせ
20　第4期白眉研究者

巻頭エッセイ

ラフカディオ・ハーンを訪ねて

再生医科学研究所 教授・白眉センター プログラムマネージャー（兼任）瀬原淳子

私は、生命の発生や再生のメカニズムを研究している。先月、日本発生生物学会の年会があり、松江に出張してきた。せっかく松江に来たのだからと、名物の割子そばを食べ、小泉八雲記念館に立ち寄ってきた。小泉八雲は、本名パトリック･ラフカディオ･ハーン（1850-1904）。アイリッシュの父とギリシャ人の母を持ち英仏で教育を受けた彼は、やがて日本文化に魅せられて、英語教師として松江尋常中学校に赴任した。そこで日本女性と結婚し、英語教育に力を注ぐとともに、日本文化に関する書物をいくつも発表し日本文化の魅力を欧米に紹介した。その後彼は、熊本、神戸、東京へと移り住み、東京帝国大学英文学講師として学生の信望も得るが、やがて解雇される。松江中学出身の父からさんざん小泉八雲の「怪談」を聞かされて育った私は、どうしてもここを訪れたかった。記念館には、八雲が好きだった虫の音を聞くための竹製の虫かごも展示されていた。ある夏の終わり、鳴き声から虫が弱ってきたことを知った八雲は、かごを開けて虫を野に放してやり、そしてその数日後亡くなった、とあった。世界を彷徨った末日本での生活を選び、日本の文化を世界に発信しつづけた八雲は、自由に生きる野の虫の姿と重なる。いろいろな意味で､彼は根無し草だったのだ。

私は、京大出身であるが、出身研究室は大学院時代に消滅、チューリッヒ大学に留学したあと、２０年近くを東京で過ごした。癌研究所、国立精神神経センター（厚労省）、東京都臨床医学総合研究所、と３つの研究所を渡り歩いてきた根無し草だ。しかしこの浮き草のような人生の中で、最も孤独に感じたのは、何故か京都大学に着任した最初の数年だった。本来は外向的な性格の私なのに、京都大学の何気ない「慣習」やそびえ立つ「垣根」に茫然とし、それらに多少なりとも慣れてくるまでに数年を要したと思う。

白眉プロジェクトは、白い毛の混じる眉をもつ中国の伝説的な賢者「白眉」のような若者を、やはり中国で良馬を見分けることのできる「伯楽」の名を持つ学内外の委員が選び抜き、自立して研究を行ってもらおうとする意欲的なプロジェクトだ。かつて子育てもあってなかなか自立を決意できなかった私には、若くして自立し研究する彼らは、とてもまぶしい存在である。ただ、白眉プロジェクトの任期は５年間、あっという間だ。京大内からだけでなく、好きな研究をやるために京大外からこのポジションを得た若手も多い。その中には、根無し草もいるに違いない。一日も早く、彼らがのびのびとしかも全力で研究に打ち込めるようにするにはどうすれば良いのだろう。優秀な白眉研究者たちは、その自由さで既存のものではない領域にも踏み込み、既成概念を覆すような研究をしてくれるだろう。新しい人的ネットワークの構築にも寄与してくれることだろう。どうすれば、その可能性をつぶすことなく伸ばせるのか。これは、京都大学の活力にこのプロジェクトをどう生かすのか？という問いかけでもある。京大だけでなく日本全体として、若手のパワーとオリジナリティーをどう育て生かすか、という問題でもあると思う。

魅せられてやってきた京都で生き生きと研究ができ、そしてより良いポジションを得て次世代研究を牽引するような存在となる、しかしできれば京大に、あるいは日本にとどまって研究を続けたい ――。京大外からやって来た白眉研究者たちにもそう思えるような５年間を過ごしてもらうことができたとき、はじめてこのプロジェクトは成功した、と言えるのではないだろうか。

（せはら　あつこ）

コラム

グローバル人材とは？白眉‘外人’研究者の視点

Jeremy Rappleye

「グローバルな人材」とは？どうすれば「グローバルな人材」を育成できるのか？おそらくこれは京都大学だけではなく、日本中の大学が直面している問題であろう。「世界」は今、大学の扉をたたき、門戸を世界に向けて開くよう迫っているのだ。京都大学は、グローバル３０や白眉といったプログラムにより、ゆっくりとその扉を開こうとしているように見える。ただ、「グローバル人材の育成」という旗を掲げながらも、その意味するところについては、確固たる自信を抱くまでには至ってないようにも見える。

私の研究テーマがグローバリゼーションと教育の関係であることもあり、この「グローバル人材」について考える機会は少なくない。ただ、アメリカ、イギリス、中国、日本で生活し、「グローバル」な経験を重ねてきたが、私自身の答えを見つけ出すことは決して容易では無かった。

一つのきっかけは、白眉プロジェクトでの研究の一環として、６カ月滞在した台湾での経験である。台湾の文化や歴史には、日本、中国そしてアメリカという３大国の影響が混ざりあって共存している。台湾社会のこうした「ハイブリッド」な姿ーマクドナルドの横にモスバーガー、そしてそれらを挟むように伝統的な包子屋。トム・クルーズの横に、木村拓哉、そして、台湾の有名女優、林立慧のポスター。スターバックス、宇治茶の喫茶店、台湾のバブルティーの店がしのぎを削るーは「台湾人はアメリカの服を着、アメリカに憧れ、中国語を話し、中華料理を食べ、日本人の心と作法を身につけている」としばしば言われる所以である。

面白いことに、こうした「ハイブリッド」さを強烈に実感していたのは、各国から来ている同僚たちの中で私だけであった。アメリカ人の研究者たちは、台湾が、単純にアメリカになりたがっていると捉え、中国人の同僚たちは、アメリカの干渉さえ無ければ、台湾はすぐに中国に「戻ってくる」と思い込んでいるようである。一方で私が出会った日本人は、台湾の中の「日本らしさ」にのみ魅せられているようでもあった。こうした台湾に住む「外人」たちと、台湾の歴史、政治や教育について議論するとき、必ずと言ってよいほど、彼ら自身の歴史観、世界観により台湾を理解しようとするのだ。

こうした歴史観、世界観自体が間違っていると言うことではなく、重要なことは、それらが、あくまでも「ローカル」で「部分的」であることを自覚し、台湾人自身が持つ感覚と異なっている事を意識することが重要なのだ。台湾人は、今日の台湾を築いた全ての力、影響を全体像として捉えている。おそらく、私がアメリカ、中国、日本の文化をそれぞれ経験してきたことで、私も台湾人と同じように俯瞰で「全体像」を見ることが出来たのかもしれない。そのことで、台湾人の同僚たちとより深い議論を交えることが出来ただけではなく、私の世界観の中の依然「ローカル」な部分を意識し、私の「台湾観」が、私の過去の経験の単なる「焼き直し」にしか過ぎないことにも気づかされたのだ。

台湾から日本に帰国した際、日本を見る目がすっかり変っていた事にも気づかされた。私にとっての日本は、「伝統的日本」と「近代西洋」の二元対立ではなく、何世紀にもわたる「融合」と「創造と再創造」の美しい結晶である。漢字、ひらがな、カタカナの美しい共存を見れば、「グローバル人材とは」という問いへの答えは明白ではないだろうか。

自分の姿をもとに他者を判断することは、「ローカル」な視点である。「グローバル」な視点とは、自身と他者との絶え間ない対話により、この「ローカル」な視点を「超越」し、新しい何かを創造していく行為である。このことを、私は、進歩に対するアメリカ的信念、絶え間ない変化を見つめる中国的な洞察、そして日本の浄土真宗の「他力本願」の概念の「ハイブリッド」により学んだ。

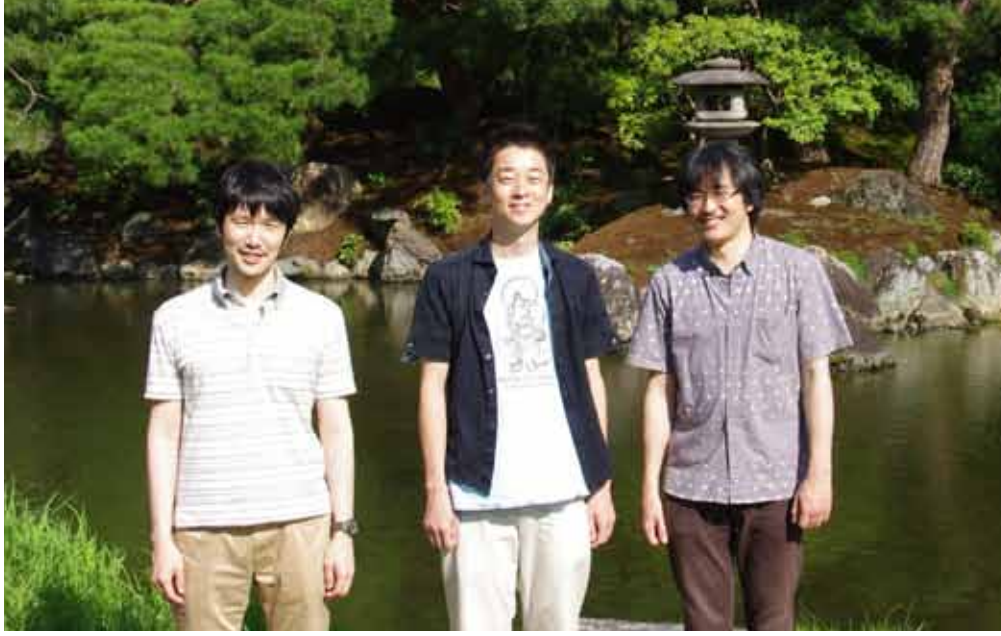
この「ローカル」「グローバル」の対立軸は、学術の世界にもあてはまる。我々は、誰もが同じ「言葉」を話す「ローカル」な場所から飛び出し、学派や専門の違い、「科学」と「社会科学」の不毛な断絶関係を超え、真の対話を重ねることで、新たな知の大地、真にグローバルな知の世界に到達する使命を帯びていると考える。

私は、京都大学や日本の社会が、「外人」である私に対して抱く期待に応えたいと切実に思う。ただ、この「外人」「日本人」という不毛な区別こそ、「ローカル」な世界観であり、この古臭い思考から脱却し、真の対話を始める手助けをすることこそが私の日本への恩返しであると考える。居心地の良い住処を離れ、長く険しい旅路へと飛び出す勇気とエネルギーのある者だけが、明日のグローバルな世界のリーダーになりえるのだ。

（じぇるみー　らぷりー）

今回は人文学を研究されているお三方に集まっていただき、ご自身の研究のお話に加えて人文学研究の現状や今後に関するお話を伺いました。

〔登場人物と研究課題〕
志田 泰盛 特定助教 ―『古典インド聖典解釈学派による音声の永遠性論証の研究』
西村 周浩 特定助教 ―『文脈の中の言語：古代イタリア諸言語が映し出す宗教的精神活動』
中西 竜也 特定助教 ―『多言語原典史料による近代中国イスラームの思想史的研究』



左から西村氏、志田氏、中西氏

シリーズ白眉対談⑤ 人文学

司会・編集：ニューズレター編集部

〔自己紹介〕
（司会）まずは、みなさんどんなことをされてるか教えてください。
（志田）志田泰盛です。専門はインド古典学とかインド哲学と呼ばれる分野で、基本的にはサンスクリットで書かれた哲学文献の分析やオリジナルテキストの復元などを目指しています。
（西村）西村周浩です。言語学をやっています。中でも印欧語族と呼ばれる言語グループに属する諸言語を比較して、個々の言語がどのような歴史をたどったか、あるいは今は失われてしまった祖先にあたる言語がどういったものだったのか考える分野です。特に僕はイタリア半島をやってますので、ラテン語をはじめとする諸言語の研究を中心に、テキストから浮かび上がってくる文化的な側面にも注目しています。
（中西）中西竜也です。専門は歴史学、中でも思想史です。具体的には中国のイスラム思想の歴史的な展開を考えています。中国の伝統的な思想との対話を通じて、イスラム思想が展開していく様相に興味があって勉強しております。

〔人文学の地位の低下？〕
（司会）お三方は研究上の話題について、一緒にお話されることもあるんですか。
（西村）研究室が相部屋の志田さんとよく話してるのは、人文学の現状ですね。つまり相対的な価値の低下っていうのが、危機感としてあるんですけども、中西さんはその点に関してどういうふうに思われます？
（中西）同意します。価値、低下してると思いますね。
（西村）それはどのあたりで感じます？
（中西）ネットで検索すると、文系、文学部は必要ないみたいな言説が溢れかえってますので。
（一同）（笑）
（西村）そう言ってる人たちの理由というのはどういうところにあるんですかね？
（中西）やっぱり人文学が直接的な役に立たないっていうところなんでしょうね。日本は物作りに秀でていて、科学技術立国であるという理念があって、だったらその得意の分野である科学技術を伸ばしたほうがいいに決まっているという考えがあるんじゃないでしょうか。それで文系なんて何をやってるかよくわからんという意見が出て来るんでしょう。
（西村）僕個人のそれに対する反論としては、僕は物作りっていうのは自分の心を技術に託すということだと思っているので、心の内面の育成ということに、やはり人文学は貢献できると思うんですよね。技術だけ磨いてればいいっていう問題ではないと思うので、そこは反論の余地はあると思うんです。じゃあ、どういう具体性をもって内面の研磨に貢献していくかってことはまた別の課題ですけどね。
（司会）今回、『白眉プロジェクト要覧』の研究者詳細を確認すると、西村さんが自分の対象にしていらっしゃることの文化的背景に憧れや畏れを失ったことはありません、って書いてあるじゃないですか。どの分野でも、文化的な背景への憧れは必要だと思います。僕の専門領域である医療政策でも文化的な背景が政策に影響与えてるところありますから、その源流から解き明かすときに、共通言語としての人文学というのはかなり重要だと実感します。
（志田）司会の方が擁護派なので、あえて人文学に批判的な立場からの詰問を想定しますと、文化的なものの重要性は認めた上で、しかしそれは趣味の領域であって、公の研究資金を入れてするべきことではない、という意見があると思うんです。私が学生時代のサンスクリットの授業には、とある企業の重役クラスの方が参加されていました。風呂敷に資料を入れて、高級車で乗り付けて、並の修士よりはいいぐらいの読みをして、そしてサッと帰られていました。当時はただかっこいいなと思ってたんですけど、多分その接し方はインド古典に対して趣味として接してるわけですよね。それはいいけれども、一方でもしも公の資金を使うのであれば、妥当な方法論で提供された新奇情報が批判的に検証されているのか、という点は外からは見えにくい部分なので、疑念があるのかなと思います。あるいは、アウトリーチ的な方向の努力も要請されるとは思いますが。
（西村）アウトリーチなどの活動を通して期待に沿おうと思うと、これはやや高飛車な言い方かもしれないですけども、人文学は人間の営みに関することをやっていながら相当基礎的なところから話し始めないと、恐らくオーディエンスの多くが途中で路頭に迷ってしまうと思うんですよね。例えば、志田さんの場合いきなりサンスクリット語の話とか、僕ならラテン語、中西さんだったら中国語とかアラビア語とかっていうところにいきなり入るとまずいと思うんですね。でもそこから離れてしまうと、一気に大衆に迎合するような気分になってしまうというジレンマがあるんですよね。オーディエンスに対しても失礼。なので、われわれも満足できて、相手も満足できるっていうその接点はどこなんだろうかって最近よく考えますね。

〔人文学研究と人々の接点〕
（司会）それぞれの分野で、今おっしゃったようなジレンマをある程度解決してうまくやってらっしゃる方はあまりいないのですか。
（志田）例えば、一般向けの入門書を書くとかですかね？
（西村）確かにそれはありますね。それに対する斜に構えた批判というのも恐

らくあったりはしますが。
（志田）「大衆に迎合している」とか「間違ってはないけど正確じゃない」とかいうやつですか？
（西村）そうですね、そういう見方が一方であるのもまた事実だと思うんですよね。
（志田）古典語なり外国語なりを通じて文献実証的な研究をしている分野では、授業や一般向けの話で原語を抜いた途端に、なんといいますかスカスカになる印象はありますね。
（西村）もちろん翻訳を使うっていうのもありなんですけど、でもそのテキストがいったいどういう人物によってどういう歴史的背景で書かれたかってことから説明しだすと、もうそれだけで話が終わってしまうことにもなりかねないんで。要求されてる前提の量っていうのが、これはどの分野も同じだと思うんですけど、そこに割く労力という点で人文学者はほかの分野に比べてやや消極的だということは事実かもしれないですね。
（志田）白眉プロジェクトに入ってから、分野を越えた人に対して自分の研究を説明する機会が増えたこともあり、短い時間で印象的なプレゼンをすることの必要性を強く感じました。私自身、アウトリーチ的活動に対して、どちらかというと消極的だったと思いますが、そういった活動が視聴率につながってるということを再認識しまして、ある意味価値の逆転現象が起こりました。外向けの話にも、何て言ったらいいんでしょうか、色々な知恵が詰まってるといいますか…。
（西村）やはり僕も白眉プロジェクトに入って考え方が変わったんですよね。それまで人文学っていうのは人類の知的財産への地道な寄与を純粋に行う、つまり美しき知の追究っていうものにこそ価値を置いてる分野なんだ、というある種の自負心みたいなものがあったりもしたんですよね。そのプライドは今もある程度ありますけど、ただその一方で白眉プロジェクトに入って、例えば天文学が専門の信川さんの話を聞くと、それなりの研究予算に対する責任と言いますか、信川さん、高校に行って出前授業をやってらっしゃるそうなんですよ。天文学も実用性うんぬんというよりも、かなり純粋学問的な側面が強いにもかかわらず、そうやって啓蒙的な活動をやってる人がいるんだという現実に直面すると、じゃあ人文学はその責任を果たしてるんだろうかって、このプロジェクトに入って思うようになりましたね。

〔人文学の社会に対する責任〕
（司会）人文学の社会に対する責任ってことですけど、中西さんはどうですか。
（中西）アウトリーチの話について言うと、どんな学問でもそうだと思うんですけど、こういう分野があるよというか、要は、人文学へ興味をひかせるような窓口的なものは、やっぱり必要なのかなと。それがなくて、いきなり研究書読まないとそこに入れないというのでは、やっぱり敷居が高いというか、誰も寄せ付けない学問になってしまうので、アウトリーチ活動の重要性は認めるのはやぶさかではないですね。で、もう一つ、ちょっとそれとは話ずれるかもしれないですけど、一番最初におっしゃってた、人文学って国の金使ってやることなのかって言う問題について言いますと、人文学の一つの使命として、これもどんな学問でもそうかもしれませんが、国家や社会が安住している常識や在り方に反論していくというところもあるかと思います。税金をつかって国家や社会の安住するところを動揺させることは、矛盾しているようですけど、人文学の責任のひとつかと思います。
（志田）研究成果の社会的還元はむしろ積極的にすべきなんでしょうが、それが世間の期待に応え、満足の行く回答となっているかという点にも問題がありそうです。オウム真理教事件のときに、一体何が起こったのか、あの教団は何者か、ということを仏教学者が問われましたが、古典学の立場から「伝統宗教と比べてこれこれの点が教義として違う」などと説明しても「それじゃオウム真理教を語ったことになってない」「仏教学は何をしてるんだ」という批判が結構あったようです。
（西村）われわれがいきなり国民の方々とダイレクトに連絡を結ぶのは難しいかもしれないんで、興味の相対的な高さに応じて、いくつかの層を形成しながら、自分たちの得てきた知識をちょっとずつ提供していくことが大事かもしれないですね。教育や執筆活動を通じて。そういうチャンネルを、つまり外に向かって開いてる窓を持ってないと密室になる。そうなるともう外側に何も形成されないことになってしまうんで、そこですよね、どこかの窓がやっぱり開いてないと。
（中西）人文学の危機とかって言ったときに、一つ言われてるのは蛸壺化の問題があるじゃないですか。それは確かにそういう外に開いた窓を閉ざしてきたことのツケでもあるかもしれません。

（西村）確かにそうですよね。今、人文学って新しい業績を出そうと思うと、かなり専門的な知識の上にまたかなり専門的な知識を築くって感じになってきてるんで、例えば僕の場合、もっと楽しく、「昔のローマ人って朝から晩までどんな生活してたんだろうか？」みたいな話が自分の研究と直結してたらまた面白いかもしれないんですけども…。
（志田）『テルマエ・ロマエ』もありますしね。
（一同）（笑）
（西村）既存の、いわゆる楽しい知識だけを勉強して伝えていくだけだと、研究者としての責任をすべて果たしてることにならないので、そこに新しい知識を足そうと思うと、どういう技術で水路の圧力や風呂の温度をコントロールしていたのかとか…そうなるともう多くの人の関心からははずれてしまうぐらい瑣末なことになってしまう。
（志田）これは先輩から聞いた話なんですけど、ブラッド・ピットが主演した『セブン・イヤーズ・イン・チベット』という映画が公開された時、ウィーン大学のチベット学にはヒッピー的な学生が大挙してきて、そして波が引くようにすぐやめていったらしいです。ですから、素人と専門家という二極ではなく、すごくわかりやすい入り口から、専門性の高いレベルまでのスペクトラムがあって、二極の間に準専門家のような人もいるという層の幅があるといいのかもしれませんね。
（西村）そうですね。ぼくがかかわっている言語学についても同じことが言えるでしょうね。
（志田）例えばその言語学については、私はまだまだド素人です。でもサンスクリットを扱う以上、印欧語研究というのは決して無視できないのですが、ナルテンプレゼンツとかプロテロギネティクとか、インド学の研究者ですら馴染みのない概念を、あるいは知らないのは私だけかもしれませんが、ともかくそういった概念を言語学の方々は当然のように扱っているということが、最近やっとわかってきました。それらの概念の機能や価値は、インド学分野の人でしたらわかると思いますが、さらに外の人になっちゃうと、もうなんのことだかわからないのではないかと思います。先ほど言った専門性のスペクトラムで言うと、隣接分野の研究者がその価値を理解しているというのが重要なのかなと思います。
（西村）確かに。そのスペクトラムが分野ごとに何本もあると思うんですよね。で、その間がぷっつり切れてるというのが不健全な状況だと思うんです。異分野融合が求められてるこの時代、僕自身そんな流れに対してちょっと斜に構えていたときもありましたけども、ここ数年はそれでは人文学が徐々に価値を失っているという今の状況を打破できないんじゃないかなという気がするんです。むしろ、ほかの分野への応用ですよね。それができていくとそれぞれに切れていたスペクトラムが一本の太いものに変わっていく余地はあるんじゃないかなという気がするんです。

〔言語・文字資料との関わり〕

（司会）皆さん何カ国語くらい、そうですね、その国に行ってレストランで注文できるぐらいのレベルだとどれぐらいいけますか？

（西村）それは相当ハードですね。

（志田）私は全然だめです。研究に必要な言葉の数で言うと、例えばインド仏教研究では人によっては古典語としてのサンスクリットとチベットと漢文とパーリ、さらに研究書で使用される西洋の諸言語が必要とされているようです。私の専門であるバラモン系の教学は、古典期にそれほどインド国外に伝播しなかったこともあり、必要な言語はもっと限られますが…。

（司会）勉強されるって意味では 5、6 カ国語勉強はされるわけですよね。

（西村）ものになるかどうかは別として、かじるっていう点で言うと言語学を専攻してる人は恐らく多くの人が 20 ぐらいいくと思うんですけどね。だけどものになるのはごく僅かです。でも中には言語の天才みたいな人がいるんで、そういう人はかなりのものに手を出して、なおかつそれが割と血肉に。僕はもう片っ端から忘れていってしまったんで、ご期待にそえるような実質的な数は言えないですね。

（司会）かじっただけでも 20 ですか。

（中西）シュリーマンているじゃないですか。40 歳くらいから言語やりだして、数か月に 1 言語ずつぐらいやったとか。だから僕は 40 になってからでもできると言い訳して今さぼってしまっています。

（司会）5、6 でも凄いなと思いますけれど。そうすると、3 人の特徴で外国語やテキストを対象にしているという意味では、何か共通で幅広く説明できるような理論なりが、出てきてもおかしくないような印象を受けるんですけど。

（志田）たしかに「ことば」を対象としているという点は共通していますが、分野毎に方法論は多様だと思います。これに関連して最近の下田正弘先生の論考では、人文学とは広く「文化」と称されるものを対象としていて、そして「ことば」は文化の一要素なわけですが、ここでいう「ことば」を文字資料に限定しても、それにどう接するかということで、方法論的に歴史学的・文献学的・行動科学的と大きく三つに分けられると論じられていたと思います。私の分野は文献学的性格が強いですが、聖典であれ哲学文献であれ、通時的に共有されてきたテキストとその表象とに主に焦点を当てるという点で、「いつ、どこで、誰が、どういう理由で、何をして云々」という事実を詳らかにする歴史学的手法とは多少態度が異なるとされています。必ずしも歴史的事実を語っているわけでもないテキスト自体を研究対象としているという点で、「先人の妄想」の研究じゃないかと言われれば、そういう側面は否定できないのですが…。それから、西村さんのご専門である言語学はやはり「ことば」を主な対象としているとはいえ、その立ち位置はまたちょっと別になると思いますが、いかがでしょうか。

（西村）幅が広いですね、言語学は。テキストに密着するものもあれば、そこから離れながらというのもありますしね。

（司会）すべての言語に共通する抽象的な理論みたいなものはあるのですか？

（西村）そういったものを構築しようとするような領域もありますね。

（司会）なるほど。そうなんですね。

（西村）人文学の学者たちの間の一つの理想型としては、一次資料は一次資料で読めるからこそ研究できるという、そういう厳格な立場っていうのもあるんですよね。なので、翻訳を使うのは邪道だという考え方があるんです。確かに一次資料を読みこなすことがテキストの中身や文化的背景を理解するには、最も正当な手段だとは思うんですけども、それ自体が非常に大変な作業で…。1 人の人間がカバーできる範囲というのも限られていますよね。たとえある程度絞られている分野であっても研究書というのはどんどんどんどん増えていきますから、日本人が例えば英語、ドイツ語、フランス語で書かれたような本や論文を、次々読んでいき、なおかつ一次資料も読んでいくっていう作業はかなりの労力を要すると思うんです。そうすると自分の領域で手一杯という状況に陥っている可能性は高いですよね。人文学の研究スタイルとして、チームプレイはあんまりやりませんが、そこをあえて研究者同士で対話をしっかり行っていくか、あるいは専門的な研究においてもある程度翻訳を許容していくっていう状況にしていかないと、先ほどのスペクトラムの話に戻りますと、人文学の中でも 1 本 1 本切れたままという状況が続いていってしまうと思うんですよね。

（志田）一次資料というものを追求していくと、碑文や写本に書いてある文字の羅列に辿り着くわけですけれども、しかし伝承中での誤写の可能性も考慮すると、写本の読みすら疑って、祖本の読みを推測することがあります。ただし、それを正当化するためには、別の外的証拠が必要です。最近、1 年以上かけた私の研究では、ある哲学文献の中のある一つの長母音がもともと短母音だったんじゃないかという推察、その 1 点だけに言語学的な知見も入れつつ頑張ってみました。私としては、研究スタイルとして好きなんですけども、ほかの分野、例えば自然科学系の方の視点から見たときに「何をしてるんだ」ということになるのかもしれません。

（西村）同じ人文学者としては、ああよくやったなと思いますよ (笑)。

（中西）テキストクリティークがないとそもそも研究が始まらない (笑)。

（西村）そう、それは本当にすばらしい発見だなと思うんですけども、やっぱりそう思わない人もたくさんいるわけですよね。でもいいじゃないか、という強気な姿勢もありだとは思うんですけど、本当にそれでいいのか…。

（司会）そういうテキストなり一次資料を管理する専門家みたいなってのはいないんですか？

（西村）志田さんがおっしゃってた一次資料っていうのは本当に写本の類で、僕が言った一次資料というのは少しゆるめで、ラテン語の場合、誰かがテキスト校訂をして、ある程度解釈も入れながら、という段階のものも広く指しうると思います。そういうものはかなり電子化されています。なのでそれを読みこなす能力があれば、いいんですけどもね。ただそうするのにも相当な鍛錬と時間が必要になってくるんで、それにプラスしてさらにほかの分野のものもってなると、なかなか…。

〔人文学への憧れ〕

（司会）今みたいなお話を聞いていると、僕はそれなりの憧れを感じるから、社会的な価値はあるかなと。

（西村）これはちょっと下世話な表現ですけど、やっぱり人文学はある程度のブランド力っていうのがないと、なかなかもたない分野じゃないかなという気がするんですよね。アメリカだとギリシア・ローマ研究はかなりブランド力を持ってて、相当な額の寄付金が古代地中海文化に憧れを持つ資産家などからあったりするらしいんですけども、そういったことっていうのは、いやらしくやる必要はないんですけど、人文学や芸術がパトロンに支えられてきたという歴史はやっぱり紛れもない事実だと思うんですよね。今はある種の規制緩和の波に飲まれてしまってて、自由競争時代と言いますかね。なので、人文学がその価値の構築を、広く大衆・国民に広げていこうとする動きっていうのは、むしろパトロン離れにつながっていて、ある種のパラドックスを引き起こしてると思うんですよね。で、今さら知識を特権化するっていうのも時代の流れに反してるんで、そこはもうオープンにやっていく必要があると思うんですけど、そうなると今度はやっぱり、さっき中西さんがおっしゃったように、「人文学なんか役に立たん！」みたいな発言が出てきたりする、そういう苦しさに直面することがあると思うんですよね。これも人文学がどうやって生き延びていくかっていうのを考える一つの問題点でしょうね。人文学に憧れを持ってくれる人がもっとたくさん出てきてくれたらいいんですけどね。

（中西）その、すみません、ギリシャ・ロー

マへの憧れを持ってる資産家の人たちの動機っていうのは、やっぱり自分たちのルーツに興味があるんですか。
（西村）文化的な背景っていうのに…。
（中西）だから人気がある。
（西村）恐らく。しかも、ギリシャ・ローマっていうとある種文化の最盛期の象徴みたいなもんですから、過去にそういった時代があったっていうのは、現代人にとって、一つの誇りになると思うんですよね。
（志田）司会の方が先ほどおっしゃった「人文学への憧れ」というものの中身をもう少し具体的にいうと、どんな感じでしょうか？
（司会）憧れって、他人に見せびらかすためにブランドの商品買うというんじゃなくて、私にはできないことができる人たちだという認識があるんですよ。
（西村）ありがたいですね。
（司会）自分にできそうにないことをやってる人は、自分が使うことがなかったとしても、いるだけで価値があると。
（志田）中身はわからないけれども、何か本質的な営み、きっと無駄ではない何かをおそらくしてるんだろうっていう推測になるのでしょうか？
（司会）自分がとてもじゃないけどやろうと思わないっていうことが、一応その 1 人の人が勝手に理解していると考えてるわけじゃなくて、複数の人がそれなりに学会を形成してやっている。学会の中でコミュニケーションができていて、お互いに理解し合っているっていうことは、まあ何かあるわけですよね。そこには。
（中西）役に立つ立たないを越えた、価値があるんでしょうね。そもそも大学って、極端な話、社会の役に立たない知を純粋培養するところがありますよね。大学の外では、役に立つか立たないかで淘汰が始まるけれども、大学の中では、そういうのを超越したところで、とにかく誰も知らないようなことを、それこそ象牙の塔の中でこつこつやってる、そしてそういうことに価値を認めています。
（司会）それはそれで何%かはあっていいかなと思うんですけどね。
（西村）ある研究分野を発展させていくっていうことを目的にするんであれば、その分野に入ってくる人たちの数を増やす、少なくともコンスタントに保つことが大事だと思うんですけども、やっぱり分野によっては、衰退傾向はあるんですよね。どうしても学生がその道に入ってくれない。そうするとその分野の先生が辞めたりしたあとには、別の人気がある分野で人事を行うっていうこともあると思うんですよ。
（中西）現実に大学は学生集めないといけないので、やっぱそうなっちゃうんでしょうね。
（司会）例えば大学院生が、5 年でゼロとかですね。そういう研究分野は、なくならないとしょうがないということなのかもしれません。それ誰にもわからない。
（一同）（笑）
（司会）僕もわからない、誰もわからない。100 年経っても、やっぱ誰もわからない。それはちょっとまずいかなと。
（西村）確かにね。もちろん、わかる人が複数いて、っていう状況があれば確かにある程度の価値は保証されるとは思うんですけども、仮にそういう分野がたくさんあったりすると、それぞれの分野にそれぞれのポストがあればいいんですけども、ポストにはやっぱり限りがあるんで、そうすると、勢力次第、あるいは将来性ですよね。だからその群雄割拠の中で勝ち抜いていく必要もあるんで、そうすると、流れに任してだけおくと、もう本当にどっかに流されてしまう…。
（志田）声の大きい人たちが勝っちゃうかもしれませんね。
（一同）（笑）
（西村）確かに。中西さんがやってらっしゃることって、ちょっと特殊だと思うんですけど、存亡という点では、むしろ独自性で押していける感じがしますね。
（中西）そうですよね。ニッチ産業っていうやつですよね。
（一同）（笑）
（中西）誰もやっていないところに新しい産業生み出していくっていう。でも、それって、今の群雄割拠理論でいくとなかなかつらいところがあります。
（西村）でも、中西さんがやってらっしゃることって、さっきもちょっと話題に出た、ある種、異分野融合的な要素っていうのは、相当あるんじゃないです？
（中西）そうですね。まあ歴史学の範囲内ですけれども、比較的割れているものを統合しようとしているところはありますね。
（西村）ということは、割と時代の流れには沿っている。
（中西）ただ、まあ世知辛い話になっちゃうんですけど実際問題として、大学は学生を集めないといけない。そこで例えば、中国イスラムみたいに、マイナーなくせに、漢語とアラビア語をともにやらないと成立しない、奇矯な学問を提供されても、学生は寄り着かないんじゃないでしょうか。それよりも、中国学なら中国学、イスラム学ならイスラム学、それぞれを深くしっかり学べる、王道的な学問のほうが、学生にとっては魅力的かもしれません。だから分野横断、確かに結構、研究者レベルでは言うんですけど、じゃあそういう分野横断的な講座みたいなのを設けようかって話にはなかなかならないんじゃないですかね。
（西村）大学にはそういうポストとか研究所なり学部なりっていうのを、僕は積極的に作ってほしいんですけどね。もちろん研究者同士が個人個人交流の意思を持ってさえいれば問題ないのかもしれないんですけども、やっぱりそれぞれの分野で新しい成果を出すのが難しくなってきてるんで、それにエネルギーを集中させている状況だと、当然交流しにくくなると思うんで、研究者それぞれの生き方の問題にもなってきますけど、僕は制度として交流するっていう選択肢を、ある程度確保する必要はやっぱあるんじゃないかなと思うんです。
（中西）白眉プロジェクトはそういう意味ではすごくよかったんですよね。分野横断を積極的に推奨しているので。
（西村）僕も、白眉プロジェクトに入るまでは、自分は一生言語学のことだけやっていくんだろうなと思ってましたけど、今は視野を広げていかないといけないという気持ちが強いですね。なので今自分が文化的なテーマにも関心を伸ばしているっていうことは、3 年くらい前にはあまり予想していなかったですね。見方によっては、あいつは雑食になったって言われるかもしれないけども、僕はそういう生き方もありじゃないかなと思うんですよね。
（志田）ただし、専門領域である純粋な言語学の分野では、今までの研究の水準を維持した上でのプラスアルファという感じですもんね。
（西村）もちろん、そこは自分の能力と時間との兼ね合いってことになってくるんで、あいつは中途半端なことしかしていないっていうような批判を受ける可能性はもちろんありますよね。でもそこはまあ覚悟の問題じゃないかっていう気がするんです。やはり蛸壺化は避けたいものですね。
（中西）自分の蛸壺にある程度は身を沈めて閉じこもるにしても、今までの方法論に閉じこもった、送りバント的な安全策ばかりで行くのではなく、たまにはちょっと冒険して大きく振ることを恐れないでいたいですね。
（西村）まずはみんなで素振りから始めましょう。
（一同）（笑）

研究の現場から

Break on through (to the other side)

江波　進一

「あることがどんなに容易であるかは、それを発明した人とそれに到達した人が知っている」――― ゲーテ

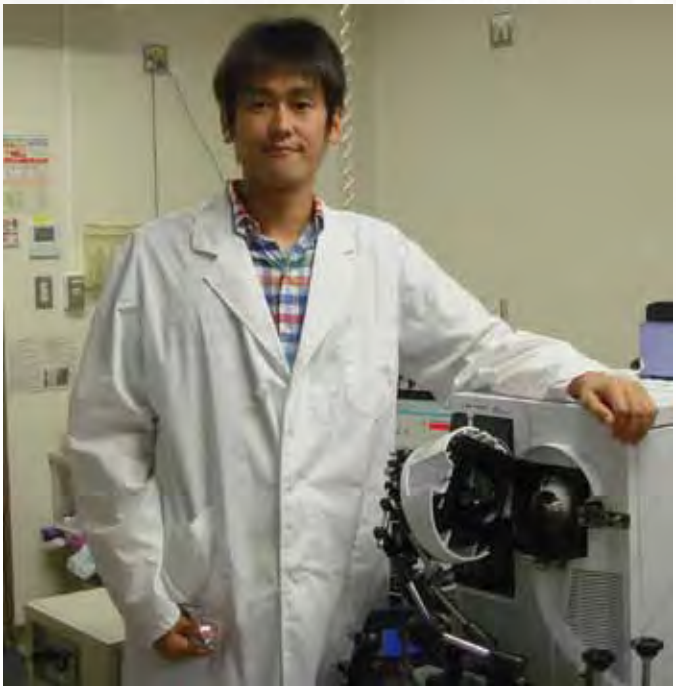
筆者の専門分野は物理化学です。具体的には物理化学的手法を用いて、大気環境や生体内で起こっている現象を分子レベルで解明しようとしています。物理化学という言葉は化学を専攻されていない方にはあまりピンと来ないかもしれません。そもそも化学とは「何か変化をするもの」すべてを対象とする学問ですが、物理化学はその変化の背後に潜んでいる本質を明らかにする学問と言えるでしょう。現象の「向こう側」にあるものを探る学問とも言えるかもしれません。日本を代表する物理化学者には日本初のノーベル化学賞を受賞された故福井謙一先生がおられます。福井先生のフロンティア軌道理論はまさに化学反応という現象の向こう側にある本質を明らかにした実例であると言えます。筆者は学部での物理化学の授業や学生実験に興味を持ち、福井先生のノーベル賞受賞を契機として作られた分子工学専攻に進学しました。そこで物理化学的手法を用いて大気環境で起きている現象を解明しようとする研究を行ってきました。学位取得後、カリフォルニア工科大学での４年半の博士研究員の経験を経て、現職に至ります。

最近は気相と液相の境界にある気液界面で起こる現象を分子レベルで解明しようとする研究を行っています。その中の一つに「ホフマイスター効果」の解明というものがあります。ホフマイスター効果は溶液中のイオンの種類によってタンパク質の沈殿のしやすさがそれぞれ異なるという現象として、１９世紀後半に Hofmeister によって報告されました。生体内での分子集合やタンパク質の構造変化、大気中での液滴の反応など、様々な現象に深く関わっているにもかかわらず、発見から 125 年たった今でもそのメカニズムはよくわかっていません。ホフマイスター効果のメカニズムの解明が進んでこなかったのには、二つの理由があると考えられます。一つはホフマイスター効果の謎を解くカギは水の界面（タンパク質ー水など）におけるイオンの挙動にあるにもかかわらず、水の界面に存在するイオンを選択的に検出する手法がなかったため。そしてもう一つは装置の感度の問題から静電相互作用が無視できるような低濃度 (10^{-6} M) での実験を行うことができなかったためです。筆者は独自に考案した水の界面厚さ約 1 ナノメートル（10^{-9}メートル）以下に存在するイオンを高感度に測定することのできる新しい実験手法を用いて、ホフマイスター効果のメカニズムを探る研究を行いました。その結果、空気ー水界面においてイオンは特定の深さの層にそれぞれ選択的に存在し、また極めて遠く離れた（イオン自身の大きさの数百倍の距離）イオン間で相互作用していることが初めて明らかになりました。また空気ーメタノールや空気ーアセトニトリルなど水以外の気液界面で同様の研究を行った結果、長距離のイオン間相互作用は液体界面の水素結合ネットワークを介して起きていることが初めて明らかになりました。本研究結果は大気化学や生化学など様々な分野に重要な影響を与える可能性があります。

白眉プロジェクトでは自由な環境の中、研究にとことん専念することができます。物理化学で大事なことは、じっくりと自由な頭で考えること（朝から晩まで、時には寝ているときにも）、そしてそれを実証するために根気強く実験することだと思います。上記のような研究成果は白眉プロジェクトでなくては出すことができなかったと思います。白眉プロジェクトと受け入れ先の生存圏研究所のスタッフの皆様に心から感謝いたします。

「思索する人間の最も美しい幸福は、探求しうるものを探究しつくし、探求しえないものを静かに敬うことである」このゲーテの境地は筆者にとってまだ遥か彼方、といった感じですが、これからも「探求しうるもの」を地に足をつけてしっかりと探究していきたいと思います。いつか「向こう側」に突き抜けるために。

（えなみ　しんいち）



ブータンで生きるということ
――地域医療の現場から

坂本　龍太

深い山中の路上で、赤ちゃんの胸に聴診器をあてた。呼吸音も心音も聞こえず、瞳孔は散大していた。赤ちゃんの死亡を告げると、父親は泣き崩れた。赤ちゃんの祖父と親戚、診療所のスタッフと私は、穴を掘った。赤ちゃんの体を埋め、その上に石を重ねて、合掌した。意識から離れていることも多いが、週に何度か思い出す光景である。その度に自分の未熟さにため息が出る。そして、自分の元気な子供たちの顔を見て、なんと恵まれていることか、と感謝する。

「ドクター、急いで来てくれ！母親が死にそうだ！」切羽詰った声で呼ばれたのは 8 時間ほど山道を歩いて辿りついた村で、靴下を脱いで脚を伸ばしている時であった。高齢者健診に関する話し合いを行うための訪問だった。分娩後の母親の容体が悪く意識が朦朧としており、生まれた赤ちゃんもおかしい、という。私は産婦人科医でもなければ小児科医でもない。学生時代や研修医時代に何例か分娩を見学したが、知識も経験も欠落している。私はできることならその場から走って逃げ出したかった。でも私以外そこに医者はいない。急いで患者の所に向かうと、家の前で若い男性が一人心配そうに動き回っていた。不自由なのか片足を引きずっていた。彼が赤ちゃんの父親だった。中に入ると保健スタッフが青ざめた顔で叫んだ。「母親が死にそうなんだ！何とかしてくれ！赤ちゃんも変なんだ！こんなことは何年も助産をしていて初めてだ！」母親は血の気を失い青白くなっており、呼びかけに何とか薄目を開けて反応する状態だった。手首を触れると橈骨動脈が触れなかった。大腿動脈を触れると弱い拍動を感じた。子宮からの出血は落ち着いていた。見えにくくなっていた肘窩の静脈に針を刺し、かろうじて補液を開始することができた。幸い輸液に反応したのか脈拍や血圧は回復してきた。赤ちゃんを見ると、腹壁が大きく欠損し腸管の大部分が体外に脱出し、チアノーゼもあった。私も実際に目にするのは初めてであった。すぐさま小児科医と産婦人科医に連絡を取り、指示を仰いだ。これは腹壁破裂という病気で出生 1 万あたり 1 ～ 5 例と言われているが、日本であれば胎児の時にすでに超音波で診断がついていることが多い。亡くなることもあるが、近年では出生前から厳重な管理下に置かれ、手術により 9 割近くが生存できるはずだ。「すぐに病院まで搬送してほしい。清潔なガーゼに生理食塩水を浸し、清潔なビニールで包むように。チアノーゼがあるなら酸素を吸入させるように」私は小児科医と産婦人科医の指示に従い、ガーゼに生理食塩水を浸しビニールで覆った。しかし、日本のように袋に入った滅菌ガーゼなどはなく、普通のガーゼであった。診療所に酸素ボンベはあったが、中身は空だった。

日が暮れ始めてきていた。「直ちに母子ともに病院に搬送しよう」と言うと、保健スタッフは表情をこわばらせた。そこから車道に出るだけで 6 時間はかかる。雨も降り始めていた。「ドクター、そんなことをしたら運ぶ側が死んでしまうかもしれない」私は異なる経路でその村まで来たので、どんな道かを知らなかった。暗闇の中、雨でぬかるんだ細い山道を歩けば、足を滑らせて山から転落するかもしれないという。「何でこんな時に降らなきゃいけないんだ！」私は激しさを増す雨に対して無性に腹が立った。父親は我が子からはみ出る腸管を見て絶望し「病院へは行かない。母親の父も『この赤ちゃんはもう無理だ、このままここで死なせてほしい』と言っている」と話していた。「搬送途中で死ぬ可能性はあるが、無事に病院に着き手術をすれば助かる可能性がある。この村でただ死を待つよりも挑戦しよう。夜が危ないというなら朝 4 時にでも出発しよう」と言ったが、了解は得られなかった。その後も説得を試みたが父親は首を縦に振らなかった。母親の状態は落ち着いてきていたが、赤ちゃんの方はこうしている間にも死んでしまうかもしれないと思った。夜明けが近づいた頃、父親は寝ている赤ちゃんに近寄り、抱きかかえた。赤ちゃんの頬を指でさすり、笑みを浮かべた。しばし赤ちゃんを見つめていた父親は意を決したようにこう言った。「ドクター、この子を何とか救いたい。ダメかもしれないけど、父親としてこの子のためにベストを尽くしたい！病院に行こう！」外を見ると雨は小降りになっていた。朝日の柔らかい光が差し込み、私は心から感謝した。新生児用の補液機材は無く、産婦人科医と電話で相談の上、乳児がいる親戚の女性に授乳してもらっていた。リスクはあった。その女性や反対していた祖父も付き添ってくれることになった。父親は足を引きずりながら歩みを始めた。村の出口まで来た時、父親は立ち止まり、マニ車を回した。涙を拭いながら懸命に祈りを捧げていた。その姿を見て私は涙をこらえることが出来なかった。

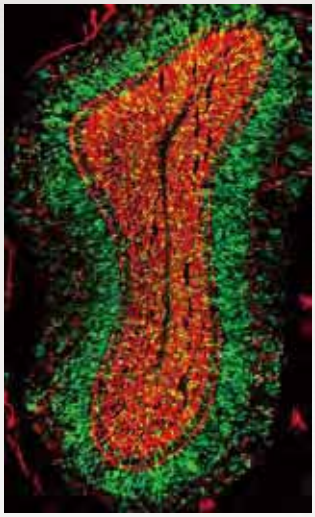
5 時間近く歩いた時、赤ちゃんは懸命に母乳を吸っていた。あと 1 時間で救急車が待機している車道に出る。何とか病院まで辿りつけるかもしれないと期待した矢先、赤ちゃんを抱いていた祖父が足を止めた。つい先ほどまでミルクを飲んでいた赤ちゃんが突如として息絶えてしまったのだ。木が鬱蒼と茂る中、赤ちゃんの亡骸を前に我々はしばらく呆然と立ち尽くした。そして、泣いた。なぜ赤ちゃんは死ななければならなかったのか。ヘリコプターは無理だと言われたが、保健省中枢にいる友人に相談すれば手配が可能だったかもしれない。立ち会った者が私ではなければ、赤ちゃんの命をきちんと助けることができたかもしれない。「赤ちゃんの命を守ることが出来ず、申し訳ございませんでした」私は父親に頭を下げた。父親は私の手を握りしめ、涙を流しながらこう話した。「俺たちは赤ちゃんのためにベストを尽くした。そうだろ、ドクター？」その時私は手を握りしめながら黙ってうなずいた。しかし、「できることが他にあったのではないか・・・」という想いが日本にいる今も波のように押し寄せる。何を言っても、あの赤ちゃんの命はもう戻っては来ない。

（さかもと　りょうた）

脳の設計図と変化する脳

今吉　格

心地よいと感じる音楽や面白いと思う映画は人それぞれである一方で、ヘビやクモの写真をいきなり見せられると（多くの人は）共通に恐怖感を覚える。人それぞれ個性や性格がある一方で、人間の脳の CT 写真や MRI 写真を見るとだいたい同じように目に映る。世の中には本当に色んな人がいると日々感じる一方で、人間の思考や行動を制御する脳が、みな同じ構造を持っている事はある意味驚きである。私が実験で使用しているマウスというげっ歯類でも、個体によって性格がある。しかし､脳を解剖してみると、ちょっと拡大して見るぐらいではすべて同じに見える。実験動物や人の個体間の個性や性格の違いは、脳のどのような違いによって生み出されるのか？について日々考えされるとともに、すべての人・動物が共通に持つ脳の設計図の正確さに驚かされる。実験室で世代を超えて飼育・繁殖されているマウスは、生まれてから一度も天敵に襲われた事もないし、見た事もないはずである。それでも、マウスはヘビの模型やキツネの匂いに対して先天的な恐怖応答を示す。つまり、天敵が本能的に怖いという情報や、天敵に対する防御反応でさえも、脳の設計図に組み込まれており、脳の発達とともに生まれながらに付加されていると考えられる。これは驚くべき事であると思う。また、脳は病気にもなる。アルツハイマー病など脳を構成する神経細胞が脱落する病気や様々な精神疾患がある。これらの脳の病気において、共通に表出してくる典型的な症状は存在するので、年をとってから発症するような脳の病気さえも、脳の設計図にあらかじめプログラムされているのではないか？とさえ感じさせられる。その反面、一卵性双生児であっても全然違う性格をしている事もあるし、喫煙習慣の有無によって脳の病気になったりならなかったりする事も知られている。



マウス嗅球の新生ニューロン

私はマウスを用いて、哺乳類の脳の設計図のしくみと、脳の可塑性について研究を行っている。具体的にはマウス胎児脳における神経幹細胞やニューロン・グリア細胞の分化制御機構と、生後脳・成体脳におけるニューロン新生という現象に着目して研究を行っている。

すべてのマウスが共通の脳の構造を発生させ、我々が無意識に行っている体温や呼吸の調節、睡眠のコントロールなどを行う為には、脳の中でニューロンが充分に産生され、神経回路が正確に配線される必要がある。胎児脳における発生過程において、必要な時・場所で、必要な種類のニューロンが産生されるためのメカニズムは、脳の設計図の中でも重要な要素である。私たちは各種遺伝子の発現をコントロールする、転写因子というたんぱく質に特に着目して研究を行っている。近年、これらの転写因子が振動的に発現するというストラテジーを採用する事によって、複雑精緻な脳を発生させる事が分かってきた。極めて厳密な発生が要求される脳において、その設計図はたんぱく質の振動とその乱れを積極的に利用している事には驚きを感じている。

また、古くから哺乳類の脳神経系を構成するニューロンは、胎児期に産生され、大人になってからは新しくは産生されないし、再生能力はないと信じられてきた。しかし、脳の中の記憶を司る海馬や、匂い情報処理の一次中枢である嗅球においては、生後や成体脳においても継続的にニューロンが産生され、神経回路に組み込まれ続ける事が明らかになってきた。脳の発生は大人になってからも引き続いて起こっているととらえる事もできる。この脳を構成するニューロンが日々の生活の中で時々刻々と入れ替るという現象は、脳が持つ可塑性の最も極端なケースであると思われる。私たちはこの成体脳ニューロン新生が記憶や匂い情報処理等の高次脳機能に積極的に関与している事を明らかにしてきた。また、最近では、生後から大人になるまでのニューロン新生の破綻と精神疾患との関与についても研究を進めている。

神経変性疾患においては、予防と早期発見が重要なのは言うまでもないが、ニューロン新生を応用する事で、失われつつある神経回路を維持・再編できないか？という試みもなされている。私の研究拠点はウイルス研究所であるが、2013 年 4 月から医学研究科メディカルイノベーションセンターにて、創薬研究を行う研究グループを立ち上げる事ができた（SK プロジェクト）。

白眉プロジェクトにいると、本当に色んな研究者に出会い、多様な研究スタイルに接する事ができる。今後も白眉の活動を通して、自分の脳研究を違った角度から眺める事を楽しみにしている。

（いまよし　いたる）

信仰と恋愛

置田 清和

クリシュナ神というヒンドゥー教の神様について研究しています。日本ではあまり馴染みがないかもしれませんが、南アジア文化圏ではとても人気のある神様です。ポスター等でよく描かれているクリシュナは横笛を持って立ち、牛と戯れている少年の姿です。

どうしてこの神様のことを研究するようになったのか。中高時代に経験した阪神大震災とインド訪問がきっかけで、生きることの意味を知りたいと思いました。究極の真実について教えてくれるのは宗教か哲学だと思ったので、学部時代は宗教学を専攻。分厚い神学書とにらめっこし、あるいは禅の本を読み、真理とは誠に深遠なりと眉間に皺を寄せる日々でした。

そんな中、クリシュナ信仰について知ったのは三回生でアメリカに留学している時。一般的に「神」というと、（その存在を受け入れるかどうかは別としても）全知全能、恐れ多い、いと高きお方、というように距離感があると思います。ところがクリシュナはやんちゃな牛飼い少年で、友達と悪戯してお母さんに怒られたり、笛を奏でて女の子と踊ったりする。その意外さに魅了されたのが今の研究の始まりです。

南アジアには「バクティ」という思想があり、日本語では「信愛」等と訳されます。「神に対する愛情を育むことで解脱が得られる」という考え方です。クリシュナ信仰もこのバクティ思想の中に位置づけられますが、僕が研究しているベンガル派では、神と信者の関係を恋愛関係になぞらえるのが特徴です。乙女が若者に惚れるように、信者は神に熱烈な愛情を抱くことが理想とされます。

写本収集で訪れたインド、アルヴァールで。

「神に対する情熱」を追求した結果、ベンガル派は神と信者の関係を不倫関係になぞらえて捉えるようになります。インド古典文学の伝統によると、クリシュナ神は地上に降誕し、様々な遊戯を繰り広げるわけですが、そこで彼に恋をする女性達の一部は既婚者ということになっています。夫以外の男性に思いを募らせる背徳。禁断の果実であるが故に恋愛感情がより燃え上がり、その状態こそが最も素晴らしいという思想です。

この考え方は、より激しい感情を求めるという視点から見るとある程度理解できると思います。しかし一般的な倫理の視点から見ると明らかに問題があり、１６世紀に成立して以来今日に至るまでベンガル派の思想は様々な批判を受けてきました。これに対してベンガル派の思想家達がどのような対応をしてきたのか、というのが現在の研究の焦点です。

具体的には、ベンガル派思想家によって書かれたサンスクリット語の文献を翻訳するのが主な仕事です。訳した上で歴史的な背景考察、他学派との比較等を通して内容を分析し、論文を書きます。ただし近代以前の文献は出版されている物が信頼出来るとは限らないので、翻訳する前に写本を集め、テキストを校訂する作業を行います。

校訂とは？たとえばある食堂で起った火災が次のように報道されました。「幸い火は天丼を焼いただけですんだ。」何か変ですね。これは「天井」の間違いです。近代以前の文献は手書きで写されていたので、このような間違いがたくさん含まれています。従って、写本を比較し、間違いを取り除く作業が校訂です。何本もの写本と比べて一字一句の違いを記録するのですが、根気のいる地道な作業です。

そして校訂の前段階としての写本収集。インドではこれが一筋縄では行きません。去年ジョドプールの研究所を訪問した際、学生証が無ければ写本を見せられないと言われ、ポスドクなので学生証は無い、と言っても取り合ってもらえませんでした。困ったなあと思っていると、突然「サンスクリットで歌えるか」と聞いて来る。そこでクリシュナ神についての歌を歌うともう大喜び。急に態度が変わり、すぐに写本を用意してくれました。やはりクリシュナ神は人気があるんだなと実感した瞬間でした。

（おきた　きよかず）

白眉研究ピックアップ

固液界面における水和構造の３次元可視化

小林　圭

液体中における液体分子の密度は通常は均一ですが、固体物質を液体中におくと、その表面（固液界面）では、液体分子と固体表面との相互作用の影響により、液体分子の密度が不均一になります。

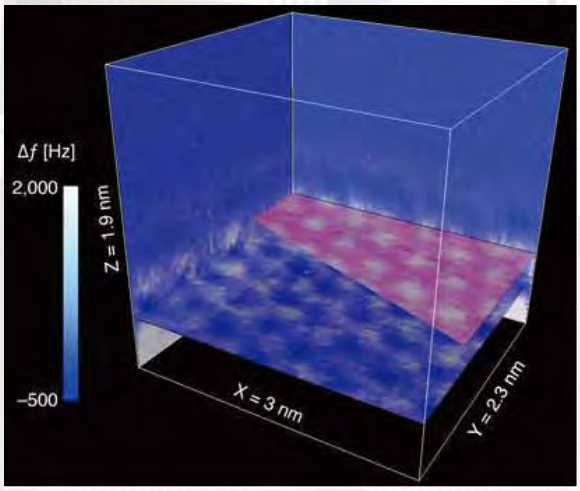
例えば、層状粘土鉱物の一種であるマイカ（雲母）の表面はアルミ・シリコン・酸素原子からなる六角形のハニカム（蜂の巣）状の格子（格子周期は約 0.5 ナノメートル）で構成されており、高い親水性を示しますが、このマイカと水との界面でも、水分子密度が不均一になることが知られています。

われわれは、周波数変調原子間力顕微鏡（FM-AFM）という装置を使い、原子レベルで尖った鋭いシリコン製の針をマイカと水の界面に近づけ、針にはたらく力を精密に測定しました。FM-AFM は、針にはたらく力を、カンチレバーと呼ばれるカセンサーの共振周波数の変化として検出しますが、水中で針をマイカ表面に近づけていくと、針がマイカ表面に衝突する直前の数ナノメートルの領域で、距離に応じてカンチレバーの共振周波数が振動的に変化しました。この測定をマイカ表面上の数ナノメートルの領域内で繰り返すことで、３次元周波数シフトマップを得ることができました。また、この周波数シフトマップから、最表面における周波数シフト分布はハニカム状パターン、そこから約 0.2 ナノメートル上方ではドット状パターンを示すことが分かりました。

一方、統計力学的な手法によって、水中のマイカ表面における水分子密度の３次元分布を計算したところ、水分子密度分布も最表面近傍でハニカム状パターン、そこから約 0.2 ナノメートル上方でドット状パターンを示すことが分かりました。さらに、マイカと水の界面で針にはたらく力をシミュレーションした結果、距離に対して力が振動的に変化する様子を再現することができました。つまり、FM-AFM によって固液界面における溶媒分子の粗密を 3 次元的に可視化することに成功したのです (Kobayashi et al. (2013) *J. Chem. Phys.*, **138**, 184704)。

今後、FM-AFM を用いて、結晶の成長や溶解、電気化学反応、生体分子の機能発現にともなう固液界面の水和構造変化をとらえることによって、こうした現象の素過程やメカニズムの解明へとつながることが期待されます。

（こばやし　けい）



マイカと水の界面における３次元周波数シフトマップ

自閉症スペクトラム障害をもつ方々の物語記憶

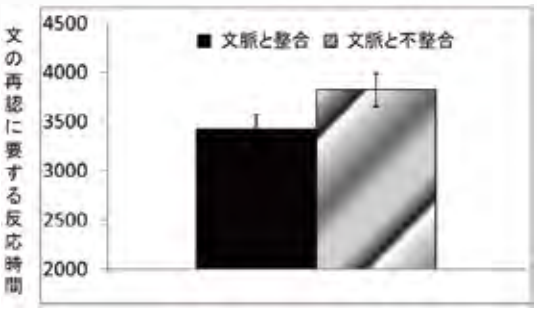
米田 英嗣

自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder: ASD) とは、社会性および対人コミュニケーションの問題、常同行動や強いこだわりによって診断される発達障害です (American Psychiatric Association, 2013)。これまでの研究では、ASD をもつ人は、物語を読んで登場人物の気持ちを理解することが難しかったり、対人場面で相手に共感をすることが難しいということが言われていました。

私たちの研究では、ASD をもつ人が他者のことを理解するのが難しい理由の一つとして、自分と似ていない相手を理解することが難しい (Komeda et al. (2013) *Acta Psychologia*, **142**, 349-355) ことによるのではないかと考え、ASD をもつ成人と定型発達 (Typically developing: TD) の成人を対象に、ASD の傾向をもった登場人物と、ASD の傾向をもたない TD の登場人物のどちらを記憶しやすいかを検討しました (Komeda et al. (2013) *Molecular Autism*, **4**:2)。その結果、ASD をもつ人は、ASD をもつ登場人物の整合的な物語をよく検索できることが明らかになりました。また、TD の人は、ASD の物語よりも、TD の物語のほうがよく検索できることもわかりました。また、物語理解や記憶の成績は、ASD をもつ人と TD の人との間で統計的な差は見られませんでした。

以上の結果から、ASD の人と TD の人との間にある違いは記憶能力の優劣ではなく、個人がもつ特性と学習するものとの相性の問題であるといえます。ASD 傾向をもつ成人や子どもが ASD をもつ成人や子どもに対して共感的反応を示すことが解明できれば、ASD 傾向をもつ人が、ASD をもつ人に対する支援者になったり、特別支援学級の教員になるというように活躍の場が広がるかもしれません。

（こめだ　ひでつぐ）



ASD をもつ人による ASD 物語の整合性における反応時間の差異
（縦軸の値の単位はミリ秒）

The Establishment of a National Human Rights Commission in Japan

Silvia Croydon

For at least fifteen years, there have been plans to create a National Human Rights Commission (NHRC) in Japan which would not only have the remit of resolving a range of individual human rights disputes, but also be involved in devising the government' s policies towards minorities and other vulnerable groups. These plans, however, have not come to fruition.

NHRCs have been established in most developed states since 1993, when the United Nations introduced guidelines for the functions and operation of such institutions. Within the community of East Asia in particular, most countries, regardless of the stage of development, have created an NHRC. Although in the case of authoritarian regimes NHRCs tend to be installed merely as a political badge of honour, i.e. in order to whitewash human rights violations, even there they nonetheless often manage, in collaboration with the UN and other transnational organisations, to deliver tangible results for the human rights cause. In Fiji, for example, the NHRC has been credited with the abolition of the death penalty. In Mongolia and the Philippines, to cite two other examples from the East Asian region, the NHRCs are said to have been instrumental in revising torture laws. Amongst the more developed countries in the region, in 2001, South Korea too joined the ranks of those states equipped with an NHRC that contributes to the civil society there.

Against this background, it is hardly surprising that the developments with regards to the establishment of an NHRC in Japan, where there exist long-standing human rights conflicts, including the discrimination of Buraku, Ainu and Korean minorities, have been followed with interest by both scholars and human rights campaigners. Aside from the potential impact on domestic human rights policies, the issue of whether a Japanese NHRC will emerge is worth following also because of a development on a regional scale. More specifically, a forum within the Asia Pacific comprised of NHRCs – namely, the Asia Pacific Forum of NHRCs – has recently provided a promise to fill the void in Asia with regards to a regional human rights mechanism. Indeed, the forum in question, which has by now come to resemble, in terms of functions, the inter-governmental human rights arrangements of Europe, North America, the Middle East and Africa, has, since its 1996 inception, expanded to cover most of the region. Japan, however – a key regional player without whose involvement no initiative in Asia could call itself truly regional, has not yet come on board. Clearly, the prospective establishment of an NHRC in Japan could significantly bolster the credibility of this forum, and so following the developments with regards to the creation of such an institution there is important.

With a view to clarifying the future of human rights protection in both Japan and the region as a whole, I am examining the progress towards the establishment of a Japanese NHRC. In particular, I am scrutinising the politics surrounding the submission in Diet on two occasions of an NHRC bill, and the challenges lying ahead.

（しるびあ　くろいどん）

Attending The Venice Academy of Human Rights. De Lido, Italy, 8 July 2014.

異分野融合ワークショップ

「科学の限界に舞う小さな青い鳥 ― 人文・社会・自然科学を含む全ての学術領域のために ― 」を企画して

楯谷　智子

白眉プロジェクトでは年に一度の活動報告会「年次報告会　白眉のコスモロジー」を、白眉研究者自らの手で企画・開催しています。

過去２回の年次報告会では、普遍性のあるテーマにつき異分野の研究者同士で語り合う「異分野融合ワークショップ」が行われました。様々な分野の若手研究者が一同に会する白眉コミュニティにとって、このような異分野融合ワークショップは、最も「白眉的」なイベントであると思います。

私は第３回年次報告会の異分野融合ワークショップ「科学の限界に舞う小さな青い鳥 ― 人文・社会・自然科学を含む全ての学術領域のために ― 」の企画に加わりました。その経験を反省を含めご紹介させていただきます。

1 なぜ「科学の限界」か

まず発端として、医学系研究者である私が常々感じている「科学の限界」がありました。現実の人間世界で起こる老いや病気といった問題解決のために、科学的世界つまり実験室では、条件を揃えて何度でも同じことを繰り返すことのできる実験環境を作ります。ただし、現実の人間世界では条件まちまちの色々な人がいて、それぞれの人生は一回きりしかありません。人生だけでなく、そもそも歴史は一回きりのもので、地球は一個しかありません。自然は大層複雑なもので、全く同一の現象は一度しか起こらないと言えます。このような現実の多様性・一回性を考えると、再現可能な実験系を構築するということは現実のいくつかのの部分を「見ないことにする」ことによってなりたっているのではないか、例えば実験のノイズとして捨てられるもののなかに、何か大事なものが隠れているということはないのだろうかといった疑問が湧いてくるのです。

今回のワークショップでどのような企画をするかを議論したときに、そのような私の印象から話が膨らみ、各研究分野のリアルな科学の限界はどうなっているのか、それに対して、各分野はどのように対処しているのか、ぜひ伺ってみたいということになりました。

2 ワークショップの目的の設定 ～準備段階の議論より

ワークショップの準備段階では、当日の登壇者のみならず多くの白眉研究者が議論に加わり、計３回の打ち合わせと電子メールでの活発な意見交換が行われました。

「科学の限界」にも様々なアプローチがあり得ますし、有名な哲学者や科学者による多くの本があるため、どのような方向性で論じるか、いかにして自分達の独自性を出すかということも、俎上に載せられました。特に、哲学者である高橋昌一郎氏の著作『理性の限界――不可能性・不確定性・不完全性』（講談社現代新書）は、多様な分野の架空の学者達がシンポジウムの形で、科学の限界をディスカッションするという設定であるため、今回の企画はその二番煎じになるのではという指摘がありました。

それに対しては、「我々の殆どが哲学者でなく、分野の具体的な限界に直面している科学者であるので、そのような科学者が様々な分野から寄り合って行なうディスカッションは、自ずと哲学者のそれとは異なったものになるだろう」といった楽観的な意見が大勢を占めました。そして、今回のワークショップは「各研究分野のリアルな科学の限界を持ち寄ることで、参加者各々が、研究者としての幸福に寄与する何らかの気づき（青い鳥）を得ること」を目標とすることになりました。

3 ワークショップ当日（是非、白眉 HP をご覧下さい！）

さてワークショップ当日は談論風発極まるところがなく、ここでは要約としてプログラムのみをご紹介します。詳細は白眉センター HP に掲載しております。是非ご覧頂けますとありがたく存じます。

〇ゆるやかな導入としての演奏　L シュポーア、6 つの歌曲 Op.154 より No.4「魔王」 バリトン：末永、ヴァイオリン：江間、ピアノ：小石
〇導入（本ワークショップの目的）：楯谷
〇話題提供
・今村（生物物理学）：自然科学は客観的かー実験系自然科学の立場から、計測に基づく仮説の検証をめぐる問題
・小石（音楽学）：ベートーヴェンの交響曲第 5 番『運命』の冒頭を例に、言葉でないもの（音楽）を言葉で表現していくアプローチの限界
・上野（理論計算機科学）：P≠NP 問題と古代思想から得られた着想ー可能性と限界という二つの相克する流れのせめぎ合い
〇クロスディスカッション　司会：小松（森林水文学）、楯谷（耳鼻咽喉科学）
〇まとめ　江間（科学技術社会論）

小松
森林水文学

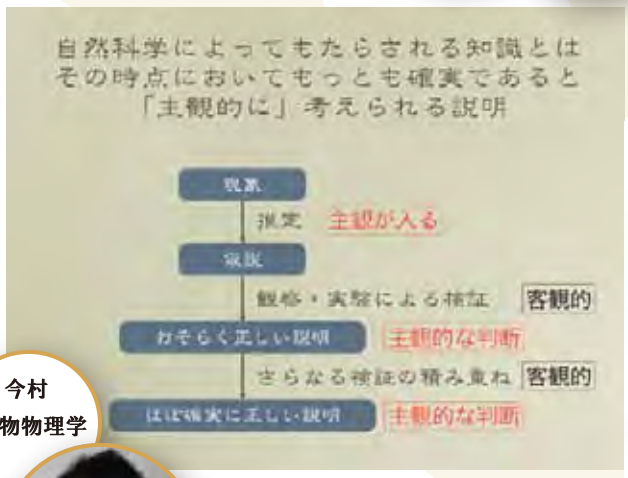
各研究分野のリアルな「科学の限界」は？

- 自然は人知を超えているに違いなく、自ずと限界が生じる
- しかし通常、研究発表では限界には触れず研究結果の意義を強調するもの
- 異分野交流が可能な白眉だからこそ、実際の研究の場で感じているリアルな「科学の限界」について問うてみたい

「青い鳥」について

- 幸福の象徴　～　メーテルリンクの童話
- 研究者もまた「青い鳥」をさがしているはず
- このワークショップでは、参加者各々が、研究者としての幸福に寄与する何らかの気づき（青い鳥）を得ることを目指す

楯谷
耳鼻咽喉科学



今村
生物物理学

小石
音楽学

上野
理論計算機科学

江間
科学技術社会論

4 後の「すっきりしない」印象 ～異分野交流の効用？

今回の企画は、多くの方々に「面白かった」と好評を頂きました。話題提供とまとめのコメントはいずれも素晴らしいものだったのですが、司会の小松・楯谷共通の反省としては、クロスディスカッションが何か混沌とした、すっきりしないものになってしまった点が残念なのでした。クロスディスカッションに関しては「あまり作り込まず、出たとこ勝負で」という方針で臨んだのですが、それだと設定時間内で消化するのが難しい部分が出てくるように思います。話題提供者への質問を一つぐらい、事前に決めておいてもよかったかもしれません。

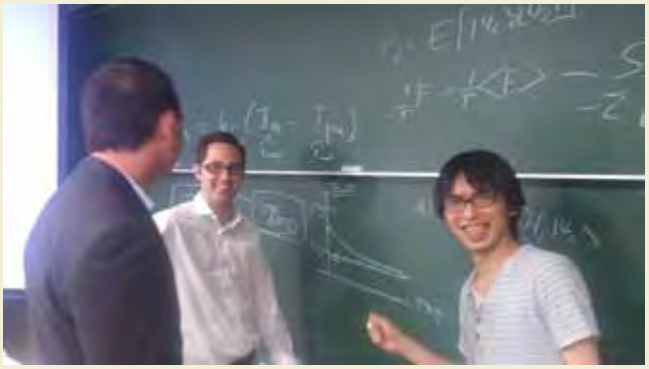
それにしてもそのような混沌は、異なるバックグラウンドを持つ複数の人間同士の議論には必然とも言えます。司会２人は今もなお、「あの議論は何だったのかなあ」とか言い合っているのですが、こういうすっきりしない議論をしたからこそ考え続けることになるのかもしれません。

この混沌とした感じは、実際にやってみないと得られないものだったと思います。まさにこの点で、今回の企画は新書『理性の限界――不可能性・不確定性・不完全性』とは違うものになったように思います。この本の中では、各分野の学者は類型化され、典型的な考え方のみ述べるので、議論も整然としたものでした。だからこそこの本は、科学の限界に関する難解な事項を、わかりやすく面白おかしく解説してくれる、言わば「分かったつもりにさせてくれる本」なのだと思います。そして、今回の企画は敢えて言うとそのような「分かったつもり」をリセットしてくれたのが良かった気がします。他分野の研究者の生き生きとした語りを聴くと、「科学の限界」という共通の題でありながらそこには全く別の地平が広がっているのを感じました。その後、当初の私の「科学の限界」は依然として自分の中にあり続けてはいるのですが、その枠組みが何だかぐにゃぐにゃと揺らいでくるような気がしました。自分がもっともらしいと考えていた「科学の限界」も、数多くの中の一つの見方に過ぎないという相対化がなされ、人文・社会・自然科学の総体であるところの「科学」の広さと奥深さの一端を垣間見たということなのだろうと思います。これは、とても面白いながらも、どこか据わりの悪いような、すっきりしない感じを伴うものでして、それは例えば、しばらく異国暮らしをした後に帰国した時、故郷の見慣れたはずの風景が新鮮に、時には奇異に映るようなものなのかもしれません。

‘Philosophy of science is about as useful to scientists as ornithology is to birds.’

物理学者のリチャード・ファインマンの言葉だそうですが、確かにこれには苦笑してしまいます。多忙な研究者にとって今回のような企画は時間の無駄、と考える人もいるでしょう。しかし、これが直接研究の進展に寄与するものではなくても、後で自分の研究領域を新しい光の下で眺めることができたら、それは研究者にとって充分意味のあることと言えるのではないでしょうか。

（たてや　ともこ）



駒場キャンパスにて、海外からの訪問者２人との議論

白眉センターを離れ、早くも８カ月近くが過ぎました。私の新しい職場は、東大のいわゆる「駒場」、とくに大学院総合文化研究科・教養学部です。教養学部は、東大の全学の 1、2 年生の教育も担っています。そのため、理系から文系まで、ほぼすべての学問分野の先生が所属していらっしゃいます。この点は白眉センターと共通で、とても楽しい学際的な環境だと思います。実際、現在私の研究室がある建物の中だけでも、物理・化学・生物と、理系の幅広い分野の先生方がいらっしゃり、日常的にお話しする機会があります。また、私は今年から、駒場の先生方を中心にした「複雑生命システム動態研究教育拠点」というプロジェクトに参加させていただいており、物理の理論家の立場から生命現象の研究に着手し始めました。今はまだまだ生命科学を勉強させていただいている段階ですが、生命科学を専門とされる先生方と学問的な交流をする貴重な機会に恵まれています。現在のこのような学際的な環境での生活をスタートするにあたり、白眉の皆様との学際的な交流の経験を活かすことができていると実感しています。

駒場では、海外からの訪問者を迎えたりもしながら、白眉同様の自由な雰囲気の中で研究を進めることができています。また、学部 1、2 年生がたくさんいる駒場の若い活気があふれる雰囲気も、私にとって刺激になっています。少しずつ新生活を軌道に乗せ、理論物理の研究をさらに飛躍させていきたいと思っております。

白眉センターに所属していた１年９か月の間は、自由な環境と貴重な学際的交流の機会をいただき、大きな刺激を受けました。最後になりましたが、この場を借りて、お世話になった皆様に深くお礼申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（さがわ　たかひろ）

沙川　貴大

第２期特定助教・在職 2011 年４月１日～ 2012 年 12 月 31 日・2013 年１月１日より東京大学大学院総合文化研究科准教授

ポスト白眉の日常

岸本　展

第２期特定助教・在職 2011 年４月１日～ 2013 年３月 31 日・2013 年４月１日より京都大学数理解析研究所講師

貴重な誌面をいただき恐縮です。現在の職場は北部構内の東端に位置し、オフィスからは隣接する理学部植物園も見える緑豊かな環境にあります。当研究所は「教育機関」として理学研究科の大学院教育にも携わっており、所員は大学院生の指導や講義を担当したりもしますが、基本的には所員が日々研究に励む「研究所」なので教育関係の分担は少なめです。私もまだ講義の担当がなく、幸いにして白眉にいた頃に近い研究生活を送ることができています。とはいえ、組織運営に関する仕事や書類書きが確実に増えてきているので、日夜研究に没頭できる生活もそう長くは続かない予感がします。

数学者は傍から見るとぼーっとしてるだけで仕事しているように見えない、とよく言われます。私もデスクの横に貼ってあるバスの時刻表を見ながら帰り支度をするものの、ふと手が止まって考え事を始めると何台か乗り過ごしてしまうことがよくありますが、そうやって思索に耽る時間の積み重ねが成果に繋がるのです（ということでご容赦いただけますでしょうか？）。その点では、研究以外の職務を極力抑えた白眉は最高の環境でした。

白眉の思い出を語る上で外せない白眉セミナー。私は少しでも曖昧なことがあると気になってなかなか先へ進めないタイプなので（数学者としては悪くないはずですが……）セミナーは消化不良気味のことが多かったものの、それぞれ全く違った視点をもとに繰り広げられる議論にわくわくしつつ、こういう場での数学者の立ち位置って何だろうといつも考えていました。明確な答えが出ないままOBとなってしまった今、白眉プロジェクトが末永く存続することを期待して、周りの大学院生や研究者に精一杯応募を勧めています。

（きしもと　のぶ）

桜の時期の数理解析研究所

第３回年次報告会（2013 年３月 11 日）

2013 年３月 11 日、芝蘭会館において，白眉プロジェクトの年次報告会が行われました。プログラムの前半「白眉プログレス」では、Cédric Tassel（固体化学）、信川正順（高エネルギー宇宙物理学）、西出俊（認知発達ロボティクス）、西村周浩（言語学）の４名から、それぞれの分野における最新の成果が報告されました。プログラムの後半「異分野融合ワークショップ」は、「科学の限界に舞う小さな青い鳥―人文・社会・自然科学を含む全ての学術領域のために」というタイトルのもと、研究者が普段感じている学問の方法論的限界について議論を行いました。最初に、楯谷智子（耳鼻咽喉科学、発生生物学）からワークショップの趣旨について説明があったのち、今村博臣（生物物理学）、上野賢哉（理論計算機科学）、小石かつら（音楽学）から、各分野における「限界」の実例が報告されました。その報告を踏まえて、上記４名に小松光（森林水文学）、江間有沙（科学技術社会論）を加えた６名によって、各分野で認められる「限界」の形の共通点･相違点､「限界」に対する各研究者の思い､また､「限界」克服のための方法などについて、討論が行われました。この「異分野融合ワークショップ」に関しては、本誌 14-16 ページに、楯谷智子による記事がありますので、あわせてご覧いただけたらと思います。

（小松 光・こまつ ひかる）

2013 白眉合宿（2013 年４月 19 ～ 20 日）

白眉プロジェクトに集う研究者の追求する研究は､様々な学術領域にひろがります。ここで期待されているのは、既存の枠組みにとらわれない、これまで予想だにされなかった新たな挑戦です。その実現には、スタッフが相互理解を深め忌憚なく意見を交換しあうことが必要不可欠です。そのため、白眉センターでは年に一度研究合宿を行ってきました。今年度も、新たに加わった４期白眉のオリエンテーションも兼ね、修学院の関西セミナーハウスにて研究合宿を行いました。合宿では白眉研究者による研究報告と討論を行うのが恒例ですが、年々メンバーが増え多様化している現状を鑑み、今回は、いくぶん研究分野が近いと思われるメンバーをグループに分け、全６グループがそれぞれ自由に趣向をこらして研究紹介をする､ということになりました。その結果､グループ討論､共通グラフによる発表、座談会形式など、さながら研究発表と発表形式の博覧会となり、12 時間を超える研究発表はあっという間に過ぎてしまいました。今回の合宿には 47 名の白眉研究者が参加。２日目午後には BBQ にて親睦を深め、分野を越えた結束をさらに固めました。

（小石 かつら・こいし かつら）

第２回白眉の日（2013 年８月３日）

白眉研究者は、互いの出会いにどれだけ知的好奇心や喜びを掻き立てられようとも、５年のうちに去らなければならない運命を背負っています。だからこそ、離職者も含め、全員で集まれる悠久の場所があっても良いじゃないか！そんな想いが､夏のひと時｢白眉の日（８月９日）｣に集約されています。今年度は、８月３日（土）に KKR 京都くに荘にて、第２回「白眉の日」を祝うイベントが開催されました。

今回もちょっとしたサプライズ、THE BOOM の『風になりたい』を選抜メンバーが唄い踊るというオープニングから始まりました。続いて、離職者の前田理、村田陽平両氏より、白眉プロジェクト在籍時の研究成果とその後の展開について講演が行われました。化学反応を理論計算で詳らかにする前田氏の斬新な試みや、世の中の空気感と社会のあり方に対する村田氏の問題提起に、改めて新鮮さを感じました。さらに、伏木亨前センター長による特別講演｡｢おいしさ｣を最先端のサイエンスによって追究した 25 年の道のりには深い感銘を覚えました。互いに方向性の異なる３つの講演、そのいずれの質疑応答においても時間が足りなくなるほど盛り上がってしまう、これが白眉の面白さでではないでしょうか！休憩時間にも、ゲームを交えながら楽しく交流を深めました。

夜には、白眉研究者の家族も一緒になって総勢 70 名による BBQ 大会、花火大会が開催され、今年も、温かく、爽やかで､笑顔こぼれる､素敵な時間を過ごしました。「白眉の日」のイベントは、来年度も８月９日頃開催される予定です。

（山﨑 正幸・やまさき まさゆき）

KKR ホテルくに荘にて

報道

・佐藤拓哉特定助教に関する記事「寄生生物巧みな支配 -宿主を改造・死のダイブに導く」が朝日新聞に掲載されました（2013 年 3 月 4 日）。

・Aaron Miller 特定助教の研究が、Japan Subculture Research Center のウェブサイト上で、Angela Kubo 氏の記事 “Getting punished in Japan: Don't throw pens at the kids”によって紹介されました（2013 年 3 月 15 日）。
http://www.japansubculture.com/corporal-punishment-getting-punished-in-japan-dont-throw-pens-at-the-kids/
　また、Aaron Miller 特定助教の研究が、The Japan Times のウェブサイト上で、Robert Whiting 氏の記事 “Corporal punishment has long history in Japanese sports” によって紹介されました（2013 年 5 月 26 日）。
http://www.japantimes.co.jp/sports/2013/05/26/baseball/corporal-punishment-has-long-history-in-japanese-sports/#.UaaKA-CqC04

・白眉プロジェクトに関する記事「若手研究者を『白眉プロジェクト』で支援」が朝日新聞に掲載されました（2013 年 5 月 29 日）。

・小石かつら特定助教の執筆記事「鍵握るのは『時間』と『場』」が神戸新聞に掲載されました（2013 年 5 月 31 日）。

・Knut Woltjen 特定准教授に関する記事「飛躍へ -京大 iPS 研究所（中）　研究室の垣根超え交流」が読売新聞に掲載されました（2013 年 6 月 16 日）。

・細将貴特定助教に関する記事「生物の右・左に着目」が読売新聞に掲載されました（2013 年 6 月 13 日）。

・米田英嗣特定准教授が KBS 京都のニュース番組で取り上げられました（2013 年 6 月 24 日）。
　また、米田英嗣特定准教授に関する記事「自分と似た性格共感？ – 京大准教授ら物語活用で解明『当事者同士支援も』」が京都新聞に掲載されました（2013 年 6 月 25 日）。
　また、米田英嗣特定准教授に関する記事「対人関係苦手な発達障害者　似たタイプの人と共感しやすい？」が中日新聞に掲載されました（2013 年 6 月 25 日）。

・中西竜也特定助教に関する記事「対話の歴史　中国ムスリム」が読売新聞に掲載されました（2013 年 7 月 2 日）。

・柳田素子（第一期白眉研究者）に関する記事「慢性腎臓病を治る病気に」が日経サイエンス 2013 年 9 月号に掲載されました（2013 年 7 月 25 日）。

・後藤励特定准教授の連載執筆記事「やさしい統計学　正しい活用法（１）～（９）」が日本経済新聞に掲載されました。（2013 年 8 月 20 日～ 30 日）。

受賞

・塩尻かおり特定助教が日本生態学会宮地賞を受賞しました（2013 年 3 月）。

・Jeremy Rappleye 特定准教授が The Comparative and International Education Society of North America より "George Bereday Award" を受賞しました（2013 年 3 月）。

・前多裕介特定助教が第３０回とやま賞（理工部門 基礎ゲノム科学）を受賞しました（2013 年 5 月）。

・志田泰盛特定助教が日本印度学仏教学会賞を受賞しました（2013 年 8 月 31 日）。

出版物紹介

Takashi Fujii
Imperial Cult and Imperial Representation in Roman Cyprus,
Stuttgart: Franz Steiner Verlag, Jan. 2013.

ギュンター・バウアー（著）、吉田耕太郎、小石かつら（訳）
『ギャンブラー・モーツァルト：「遊びの世紀」に生きた天才』
東京：春秋社、2013 年 7 月

第 4 期白眉研究者

名前
受入部局
研究課題
前職

Woltjen, Knut
iPS 細胞研究所
ヒト幹細胞遺伝子工学によるノンコーディング DNA の機能評価
京都大学 iPS 細胞研究所・特定拠点助教

額定其労
法学研究科
モンゴル法制史研究の原典史料に基づいた再構築
京都大学大学院法学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員（DC1）

王 柳蘭
地域研究統合情報センター
アジアにおける中国系ディアスポラの多元的共生空間の生成
京都大学地域研究統合情報センター・日本学術振興会特別研究員（RPD）

置田 清和
文学研究科
近世南アジアにおける感情の歴史
京都大学大学院文学研究科･日本学術振興会特別研究員（PD）

加藤 裕美
東南アジア研究所
熱帯型プランテーション開発と地域住民の生存基盤安定
早稲田大学アジア太平洋研究センター・助手

小出 陽平
農学研究科
イネ種間雑種における不稔発生機構解明と異種親和性遺伝子の創出
国際農林水産業研究センター・日本学術振興会特別研究員（PD）

小林 圭
工学研究科
生体分子と水との相互作用計測に基づく生体機能発現の可視化
京都大学産官学連携本部・助教

米田 英嗣
教育学研究科
自閉症者の感情理解メカニズムの解明
カーネギーメロン大学認知脳科学センター・研究員

齋藤 隆之
理学研究科
超高エネルギーガンマ線で探るパルサーの放射機構
マックスプランク物理学研究所・研究員

重森 正樹
基礎物理学研究所
弦理論とブラックホールの物理
名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構・特任助教

Giraud, Vincent
文学研究科
形而上学を超えた日本の道程：京都学派と新プラトン主義
京都大学大学院文学研究科・日本学術振興会外国人特別研究員

Deroche, Marc-Henri
文学研究科
ゾクチェン哲学から見た心の本性
京都大学大学院文学研究科・日本政府（文部科学省）奨学金博士課程

Trenson, Steven
人間・環境学研究科
日本中世における密教神道交渉史の研究
京都大学高等教育研究開発推進機構・特定准教授

西本 希呼
東南アジア研究所
無文字社会の数概念の研究 - オーストロネシア語圏を中心に
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・日本学術振興会特別研究員（PD）

花田 政範
基礎物理学研究所
素粒子物理学の未解決問題に対する計算物理学的アプローチ
高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所・特任助教

原村 隆司
フィールド科学教育研究センター（瀬戸臨海実験所）
進化生態学的手法を用いた、外来生物の新たな駆除法の開発
南九州大学環境園芸学部・研究員

藤井 啓祐
情報学研究科
スケーラブル量子情報処理のための量子フォールトトレランス理論
大阪大学大学院基礎工学研究科・特任研究員

藤井 崇
文学研究科
死を刻む：ギリシア語銘文からみた古代地中海世界の死生学
オクスフォード大学ウルフソン学寮・リサーチフェロー、日本学術振興会海外特別研究員

細 将貴
理学研究科
左右非対称性の進化生物学
Naturalis Biodiversity Center・日本学術振興会海外特別研究員

『白眉センターだより』第 6 号
2013 年 9 月 30 日発行
編集・発行　京都大学白眉センター
〒 606-8501　京都市左京区吉田牛ノ宮町
TEL：075-753-5315　FAX：075-753-5310
Eメール：info@hakubi.kyoto-u.ac.jp
URL：http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/
印刷　株式会社　サンワ
©2013 The Hakubi Project, Kyoto University

表紙写真：京都水族館　ケープペンギン（撮影者・前多　裕介）